

こども教育会議 会議録 (速記メモ)

日時 令和2年10月21日(水) 13:30~14:35	場所 武雄市役所 全員協議会室	出席 小松市長、松尾教育長 教育委員(一ノ瀬、大庭、馬場、山口、岡本、田中、大渡、井手、欠席:堀田) 牟田こども教育部長、永尾こども教育部理事 教育総務課(諸岡課長)、学校教育課(古川課長) 新たな学校づくり推進室(井手室長、徳永教育監) 諸岡総務部理事、防災・減災課(西山課長、犬走係長) 庭木企画部長、企画政策課(松尾課長、中村係長、筒井)
------------------------------------	-----------------------	---

1. 協議件名 第24回こども教育会議(防災教育と災害時のICT活用について)

議事録

内容	<p>1 開会(進行:庭木企画部長)</p> <p>2 議事(議事進行:小松市長)</p> <p>(1)防災教育と災害時のICT活用について</p> <p>①話題提供</p> <p>防災・減災課から防災教育の取り組み状況と、新たな学校づくり推進室から災害時のICT活用の状況について説明を行った。</p> <p>②意見交換</p> <p><出席者の意見></p> <ul style="list-style-type: none"> 出前講座は大変良い取り組みである。自分の地域でもぜひ活用したい。 出前講座の受講後は、長く地区に住んでいる方と地域性について話す機会を設け、ハザードマップを確認し、実際に歩いてみる等行動に移すことが大切である。防災だけを意識した取り組みだけではなく、クイズ形式やウォークラリー的な要素を取り入れ、親子で楽しみながら参加して学ぶ機会が作れたらよいと思う。また、子ども達は、大人が普段行かないような場所で遊ぶ等行動範囲が広いいため、子どもと地域を歩くことで平時からの危険な場所を把握することができるのではないだろうか。 未就学児も参加させることで危険箇所を把握し、低学年からの意識付けにつながる。 地域での活動や体験を通じて、楽しみの中から自然環境を学び、郷土愛の醸成につながるのではないかと思います。 ICT活用に関して、市内全域が避難指示となった場合、今後も避難所が混雑することが想定され、避難所の利用状況(混雑情報)がリモートで分かれば、これまで避難所に避難することを躊躇していた人も避難しやすくなるのではないだろうか。 学校現場の避難訓練では、火災予防や不審者対応による命を守る、お互い助け合うための学習を行ってきた。これからは、災害における自助、共助を培うために情報力、情報処理力を高める取り組みを学校や地域で行っていく必要がある。 中学生や高校生においては、近所の高齢者宅の把握やネット等を活用して高齢者を手助けする手段を考えることで共助への意識が高まるのではないだろうか。 意識を高めるためには、体験することが最もよいため、避難経路を实际歩いてみる、学校に留まらざるを得ない場合を想定し、学校に宿泊してみる体験等もよいのではないだろうか。 体験を語り継いでいくことが大切である。「わたしたちの武雄」等に動画ライブラリーを設け、いつでも視聴できる工夫があればよいと思う。 学校で防災教育の年間計画を立てる際は、先生が自分の教科において、どういった教育や活動が防災教育につながるかを意識して考えておくことが必要ではないだろうか。 防災への取り組みは、将来大人になっても必要なものであり、継続することが大切である。
----	---

- ・防災意識を常に持つことが大事である。子ども達の防災意識を高めるためには、家庭、地域の力が欠かせない。
- ・自分の地域がどのような災害に弱いのか、ハザードマップの概略、過去の被害状況等を把握しておくことが大切である。
- ・避難所開設時は、特に地域の協力体制が必要と感じた。
- ・家庭の防災意識を高めるため、「武雄防災を考える週間」等を設け、全ての学校、保育園で保護者参観の日をつくり、子どもと大人が共に防災教育に触れる機会があればよいと思う。出前講座には限りがあると思うため、各組織で取り組みを行うことも大切である。
- ・コロナで休校中、オンラインで先生や子ども達がつながっていることはとても良い取り組みであった。また、電話だけでなくオンラインでのやり取りはみんなとつながることができるメリットがある。子どもたちのタブレットだけでなく、親もつながる方法があれば、避難先でも情報が共有できるのではないだろうか。
- ・自宅が冠水した時、共助では区長さん、地域の方のお世話になった。共助も大切であるが、裏口からお隣の家を通して避難する場合もあるため、近隣同士での「互助」の大切さも感じた。隣の方へ助けを求めることができる関係づくりが大切である。そういった関係づくりが防災教育以外にも活かせる。
- ・市民の防災への意識は非常に高まっていると感じる。子ども達は、自助、共助の力を持ち合わせているため、それを活かすための仕組みや地域づくりが必要であり、またそれを考える時間をつくる必要がある。
- ・幼い頃は、非常時を少しワクワクした気持ちで捉えることがある。その気持ちを防災教育の中で、市子連、町子連、地域、消防団等と連携し活動を行うことで意識を更に高めることができるのではと思う。
- ・ICT の活用において、電源喪失時の対策が必要になってくるのではないだろうか。ポータブル電源が学校や公民館に配置できればよい。
- ・浸水の際、外国人の方が高い水位の中を水に浸かって避難している状況を見た。外国人の方への地域のサポートが必要と感じた。
- ・発達段階に応じた行動の在り方を考え防災教育に取り組む必要がある。
- ・報道で、警戒を呼び掛ける言葉(50年に1度の〇〇等)を近年多く耳にする。その言葉に慣れてしまうことがないよう注意しなければならない。風速や雨量等の知識を身につけるため、体験できる機会があればよいと思う。

<市長の発言>

- ・防災意識の高まりから今後も避難所に避難する人が増えていくと想定される。避難所の体制について、今後も検討していく。
- ・学校生活における避難訓練だけでなく、日常の中での防災教育の高まりが感じられ、質の変化を感じる。知識や意識だけでなく、体験や行動にどう移していくかが今後の課題だと感じた。
- ・「語り継ぐ」ことや ICT を活用した動画ライブラリーの取り組みは、伝えることの手段として今後必要である。
- ・避難所が増えれば職員だけでは対応ができない。地域の方の協力が欠かせない。これまでも高校生や中学生が避難所の運営を協力してくれた事例がある。そういった取り組みが広がってほしい。
- ・子どもだけでなく親子で防災教育に触れる機会も必要である。
- ・命を守る行動を平常時から体に染みこませておくことが大切である。
- ・電源喪失時の対応については、検討が必要である。
- ・非常時の外国人の方への支援は欠かせない。近くに 1 人でもサポートできる人、連絡できる人とのつながりが重要である。今後も対策を検討していく。
- ・防災を防災教育だけで考えるのではなく、既にあるものと上手く組み合わせることが必要である。
- ・昨年の災害時は、市内だけでなく全国からボランティアスタッフに協力いただいた。中には、高校生や大学生が参加していた。学生時代のそういった経験は、体で覚えた経験となり、絶対忘れることはない。機会があれば、中学生、高校生にも経験してもらいたい。

3 閉会(進行:庭木企画部長)